

感染症と「ヒト社会」のあり方

「友の会」 木村元廣

気候変動の影響で、「50年、100年に一度」と言われていた自然災害が、最近では毎年のように起こるようになりました。しかも「まだ入り口であり、今後さらに激しくなる」と言われています。今回の「コロナ危機」も、新たな世界的感染症がこれから次々に起こっていく、その「入り口」なのではないでしょうか。もしそうだとすれば、感染の終息を待ち望むだけでなく、その根本的な要因も探り見直すことも必要でしょう。

そのためには歴史から学ぶことも大切かなと思いつき、図書館で探してみると『**感染症と文明**』（山本太郎著 岩波新書）に出会いました。狩猟採集社会から農耕・定住社会への変化に伴う感染症の変化、世界文明と感染症の関わり等も紹介されています。感染症という視点で歴史を見つめ直すと、新たな世界史像が垣間見えるようでした。そこで今回は、この本を中心に感染症の歴史をたどることにします。

1、感染症は「ヒト社会のあり方」と関わっている？

著者の山本太郎氏は、雑誌「中央公論」4月号の中で「なぜ、ある感染症が流行するのか。これまで私たち研究者は、その原因を一生懸命に考えてきた。しかし、どうやらその考え方は『逆』ではないかと、私は近年思い始めている」と述べています。つまり、感染爆発は「ヒト社会のあり方」に深く関わっているということです。

今回の新型コロナウイルス感染症も「人の行き来により格段に狭くなった世界、野生動物が暮らす生態系への、私たち人間のとめどない進出。温暖化による野生動物の生息域の縮小。そうしたことが新たな感染症の流行と拡大をもたらした」と指摘しています。

何となくわかりますが、気候変動や野生動物の生息域の縮小が、新たな感染症と具体的にどうつながっているのかな、と思っていると、「毎日新聞」（4月28日付）の「シリーズ疫病と人間」（寄稿 山極寿一・京都大学長）が、それに答えてくれました。

2、エボラ出血熱がゴリラやチンパンジーを直撃

山極寿一氏は、近年コンゴ民主共和国などでエボラ出血熱がたびたび勃発し、ゴリラやチンパンジーが大量に死んだ事例を紹介されていました。

ウイルス感染症は野生動物（中でもコウモリ）に由来するという説が多いのですが、コウモリは洞窟や樹上に集合して眠る習性があり、これまでゴリラやチンパンジーとコウモリが接触する機会はなかったそうです。ところが、森林の伐採によってその接触機会が増大します。山極氏は「これまで手付かずだった原生林に開発の手が入り、動物たちの動きが制限されて接触の機会が変化したことが、感染経路を広げたことは確かなようだ」と述べています。さらに、森林伐採によって森の中に縦横無尽に大型トラックが走る道路がで

き、都市との物資の輸送・人間の往来が簡単になります。その中で、現金収入を求めて野生動物を狩猟し都市で売りさばく人々も増加しました。

「ウイルスに感染した野生動物が都市に出荷され、感染した村人たちも発症する前に都市との間を移動する機会が増え、あっという間に感染症が広がる。こうしてアフリカの熱帯森林に限られていたエボラ出血熱は、国境を越えて米国にまで出現したのである」と書いていました。今回の新型コロナウイルスも、コウモリからセンザンコウを経由して人に感染したのではないか、武漢の市場での野生動物の販売の中でヒトへ感染したのではないか、等々の憶測が流れています。

ゴリラやチンパンジーは移動する範囲が限られるので、感染の拡大も一定の範囲に限定されます。しかし、人間の行動範囲は大きく広がり、現代ではグローバルなヒトやモノの動きが加速しています。こうした人間の行動の変化こそが世界的な感染爆発を起こす要因であることは確かなようです。

3、ペストの大流行と、その後の新大陸の発見・征服

それでは『感染症と文明』の内容に沿って世界の歴史を振り返ってみます。この本でも中世ヨーロッパでの「黒死病」(ペスト)の流行のことが紹介されています。

14世紀、ペストは最初に中央アジアに広がり、そこから中国の浙江流域で大流行を起こし、それがヨーロッパに運ばれて猛威をふるったそうです。モンゴル帝国の拡大によるヒトとモノの交流の拡大が背景にあるとも言われています。

この流行によって亡くなった人の数は2500万~3000万人、ヨーロッパ全人口の3分の1にも達したそうです。その結果、農奴やそれに依存した荘園制の崩壊が加速。教会が権威を失い「国家」が人々の意識に登場し、封建的な身分制度の解体へと向かいます。それは、新しい価値観の創造へとつながりました。

山本氏は「半世紀にわたるペスト流行の恐怖の後、ヨーロッパは、ある意味で静謐で平和な時間を迎えた。それが内面的な思索を深めさせたという歴史家もいる。…ヨーロッパはイタリアを中心にルネサンスを迎え、文化的復興を遂げる。ペスト以前と以降を比較すれば、ヨーロッパ社会は、まったく異なった社会へと変貌した」と述べています。

中世の終焉、近世社会を迎えたヨーロッパは、やがてコロンブスの新大陸発見(1492年)以後、新大陸やアフリカへと踏み出していくことになります。

16世紀にはスペインやポルトガルによってインカ帝国やアステカが征服されます。「なぜ、簡単に滅びたのか」疑問に思っていましたが、これも感染症と深い関わりがあったようです。ヨーロッパ人によって天然痘や麻疹(はしか)等が持ち込まれ、その免疫がなかった先住民たちに感染・流行が広がったのです。

1532年、スペインの征服者ピサロは、たった168人の部隊を率いて、8万の兵士がいたインカ帝国を征服しました。その勝敗の決着は戦う前からついていたようです。

当時、先住民もスペイン人も「疫病が神の怒りである」と信じていました。その怒りが先住民にのみ襲い、征服者には降りかからなかった。キリストや聖母マリアという神の恩恵を受けた征服者に先住民たちはどれほど恐れおののいたことでしょう。

その結果が、ヨーロッパに莫大な富をもたらし、大航海時代、アジアやアフリカの植民地化、重商主義から資本主義の時代へと世界の歴史を転換させることになったのです。

4、植民地主義と感染症

コロンブスが発見したのはカリブ海のエスピノーラ島。キューバ島の隣の島で現在はハイチとドミニカ共和国があります。当時のハイチの先住民（タイノ・アラクワ族）は、ヨーロッパから持ち込まれた天然痘によって人口が3分の1以下に減少。続いて麻疹やジフテリア・おたふく風邪等の流行で絶滅の危機に…。その労働力の代わりを補充するために始まったのが西アフリカを拠点とする奴隷貿易です。奴隷労働は超過酷で、ハイチで暮らす黒人は20年ですべて入れ替わったそうです。にもかかわらず、1600年代後半2,000人だった黒人人口が100年後には50万人に達しました。いかに多くの黒人奴隷がハイチに運ばれたかわかりますね。

もちろん、ヨーロッパの征服者に対しても、アフリカやアジアに土着していた風土病が襲いかかります。1816年～37年にかけて西アフリカに駐留したイギリス軍の死亡率は4割を超えました。また、19世紀に西アフリカに派遣された宣教師の死亡率は5割を超えました。その多くがマラリアなどの熱病です。これらの熱病がアフリカ進出に対する最大の障壁となったそうです。

ところが、南米の先住民が伝統的に解熱剤として用いていたキナの樹皮に抗マラリア効果があることが偶然発見され、1827年にはマラリア治療薬キニーネとして商業生産を開始します。その効果はすばらしく、キニーネが導入されて以降の死亡者は激減。それによってアフリカの植民地化の完成に向かったのです。南アメリカに自生する植物が、ヨーロッパ人によるアフリカの植民地化を助けたというのは、まことに皮肉な話ですね。

5、植民地化の過程の中で、病原菌を次々に発見

感染症は病原菌によって起こるということがわかったのは、人間の歴史で言えばつい最近のことです。1876年にコッホが炭疽病の原因が細菌であることを初めて証明し、その後、結核菌（1882年）、コレラ菌（1883年）などを発見。今からわずか150年ほど前までは、病気がなぜ起こるのかということが解明されていなかったのです。

細菌の発見によって医学は飛躍的に発展しました。私たちはその恩恵を受けて暮らしています。しかし、病原菌の研究の多くは、アジアやアフリカの植民地化と深く関わっているのです。

著者は『感染症と文明』の中で、「初期のノーベル生理学・医学賞受賞者と授賞理由を見ていくと、西洋近代医学が、熱帯地域の医療実践からいかに多くの発見と知見を得たかがわかる」とし、「こうした研究は、当時の植民地を舞台として行われた。彼らの多くは軍医か海外駐在の植民地医務官であった」と書いています。

6、第1次大戦下で広がったスペイン風邪

アフリカの植民地化を完成させた後、今度は列強諸国が植民地の再分割を争って戦争が起こります。それが1914年に勃発した第1次世界大戦です。当初の戦場はヨーロッパでしたが、やがてヨーロッパ列強が支配する植民地を通して全世界に広がります。その時に大流行したのがスペイン風邪です。

大戦末期の1918年、アメリカもヨーロッパ戦線に参戦します。その時すでにアメリカでは流行が始まっていました。大西洋を渡った船の中は多くの兵士で混み合い、前線での兵舎や塹壕でも密集。当然感染は拡大しますよね。さらに、第1次大戦では人や物資が植民地を巻き込んで速く移動。それに伴って感染も急速に拡大し、人類史上最悪のパンデミック（感染症の世界流行）と言われる大きな被害を出しました。中でもインドやアフリカの犠牲者が多く、世界大戦での戦死者の数よりも、スペイン風邪による犠牲者の方がはるかに上回っていたそうです。

※大戦中は各国とも厳しい報道統制下にあり、大戦に参加していなかったスペインで大きく報道されたため、世界的に「スペイン風邪」と呼ばれるようになりました。

※当時スペイン風邪の正体は不明でしたが、その後H1N1型というA型インフルエンザウイルスに分類されることがわかってきました。（中屋敷均著『ウイルスは生きている』参照）

もし、スペイン風邪の流行が世界大戦中に起こっていなかったら、感染の拡大はゆるやかに進み、これほどの犠牲者は出なかったでしょう。しかし、それらの悲劇から十分な教訓を学べなかったのか、その20年後には第2次世界大戦が勃発しました。

7、医学の進歩・発展と感染症

1961年にアメリカの公衆衛生局長官は「感染症の教科書を閉じ、疫病に対する戦いに勝利したと宣言する時が来た」と、議会公聴会で発言したそうです。

ペニシリンなどの抗生物質の開発やポリオ・ワクチンが開発が進み、天然痘根絶計画は達成まであと一歩まで来ていたので、慢心したのでしょうか。しかし、現在の私たちは、それが幻想でしかなかったことを実感させられています。

1929年にフレミングが、青カビが産生する物質に抗菌作用があることを発見。それから10数年後、ペニシリンが実用化され、アメリカでは国家プロジェクトとしてペニシリンの大量生産に取り組みます。ペニシリンは多くの負傷兵・戦傷兵を救い、第2次世界大戦では感染症による死亡者が、銃弾による死亡者の数を下回ったそうです。

※でも、日本軍はその恩恵を受けられなかった…。フィリピン、ビルマ、ニューギニアなど南方戦線に投入され戦死した人の多くは、実際の戦闘ではなく餓死とマラリアなどの疫病によって死亡したと言われています。

確かに戦後の医学の発展はめざましい。とりわけ抗生物質の開発は画期的でした。しかし、今やその抗生物質の過剰投与による耐性病原菌の出現が大きな問題に…。『感染症と文明』の著者山本太郎氏は、『抗生物質と人間』（岩波新書）の中で、抗生物質の過剰投与がもたらす人間及び生物への影響について詳しく紹介されています。

また、感染症の歴史については、最近『感染症対人類の世界史』（著者 池上彰＋増田ユリア ポプラ新書）が発行されました。人類は感染症とどう向き合い、克服してきたかについて、かなり詳しく紹介されています。池上彰さんは、他国や他人をSNSなどで攻撃・拡散する状況を取り上げて「今最も悪いのはデマです」と述べ、増田ユリアさんは「歴史を知っておくだけでも少し落ち着けるはず…基礎的な教養を身につけることが（デマなどに対する）ワクチンになると思います」と述べています。確かに歴史から学ぶことは大切ですね。この本は、対談形式なので読みやすいですよ。

記 2020.7.1.